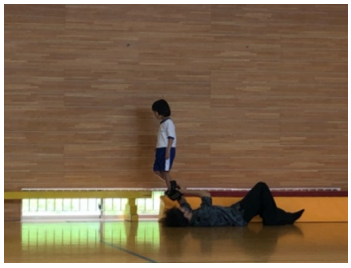
【事業実績】

福祉とアートの新しい可能性を試みる気鋭の福祉実験ユニット「ヘラルボニー」による新しいプロジェクト「ROUTINE RECORDS（ルーティンレコーズ）」を紹介した。

本プロジェクトは、知的に障害のある人が習慣的に繰り返す日常の行動から生まれる音や言葉を音源にして音楽として届ける試みで、制作・展示・調査研究の３つの要素で構成された。

１．制作：ルーティン音の聴取

協力施設と個人（5 施設 13 名）…アトリエやっほぅ!!（京都府）、金沢大学附属特別支援学校（石川県）、さふらん生活園（愛知県）、地域支援センターポレポレ（石川県）、松田翔太（岩手県）、やまなみ工房（滋賀県）



金沢大学附属特別支援学校

構成団体関係者の声

「今まで音という視点で着目していなかった。彼らが楽しんでやっていることが肯定されることがあるのだと、職員側の意識が変わっていった」（金沢大学附属特別支援学校）

「障害理解に関する研修なども大切だが、今回のように一緒に何かに取り組むのは相互理解につながりやすい」（地域支援センターポレポレ）

地域支援センターポレポレ

２．展示：「lab.5 ROUTINE RECORDS」展

会　場：金沢 21 世紀美術館デザインギャラリー

会　期：2022 年 10 月 1 日（土）-2023 年 3 月 21 日（火・祝）
　　のべ 143 日間

来場者：83,962 名

構　成：16 種類のルーティン音の展示、聴取風景の映像、DJ ブース、ルーティン音から生まれた楽曲の視聴ブース

photo: Keizo Kioku

鑑賞者の声

「ルーティンを作品に（しかも音楽とは！）というコンセプトがとても興味深かったです。発見、気づきのよろこびがありました」(30 代女性・富山県)

「人間の生きる力を感じた。共生社会をつくるためには他人一人一人のことを知ることが大切だと思う」（50 代男性・白山市）

「その人の“日常”を大事にしないといけないですね。自閉症の息子の日常も見直してみます」（50 代女性・金沢市）

photo: Akifumi Nakagawa

３．調査研究

① 関連プログラムの実施

協力施設関係者とのトークプログラム（10 月・1 月）

インクルージョン研究者・野口晃菜を交えたオンライン座談会（11 月）

地元 DJ のパフォーマンスと lab.リサーチサポーターによる鑑賞体験サポート（1 月-3 月）

展覧会のテーマに沿った絵本の読み聞かせ後、光と振動で音を感知するデバイスを使った展示体験を実施（2 月）

関係者によるトーク、展示参加者の紹介、DJ ブースを監修した DJ と自閉症とともに生きるラッパーのパフォーマンスを最終日に実施（3 月）

参加者の声

※絵本アンケートより

「音をつくるのがおもしろかった」（6 歳）「メロディーを作るのと音楽を聞くのが楽しかった」（8 歳）

「子どもと美術館を楽しむきっかけになりました。難しそうなアート作品を身近に感じました！」(3 歳保護者)

※クロージング・トーク＆パフォーマンス アンケートより

「登壇された方々、ルーティナーの方、参加者の心が一つになったような感動を覚えた」（70 代以上女性・金沢市）

「やさしい気持ちになれる時間でした。 すてき、すきという気持ちが色々な形で社会をやさしいものにしていくと信じています！」（30 代女性・神戸）

「聾者のために手話通訳、オンテナ装着を準備してもらえたおかげで、聞こえる人と一緒に楽しめて良かったです」（50 代女性・横浜）

② 聴覚に障害のある人が音の展示に親しむためのアクセシビリティ向上

- 音を光や振動で感知できるデバイス Ontenna を活用
- トーク会場に手話通訳者を配置し、記録動画に日本字幕を設置

トーク会場の手話通訳者（10 月）

③ 展示体験の評価

- トークとパフォーマンス参加者へのアンケートの実施
- プロジェクトボランティア「lab.リサーチサポーター 」による活動（10 名のボランティアが特別支援学校や福祉施設の団体来館対応、来場者の体験サポートや聞き取り調査を実施）

福祉施設支援員の声

「サポーターがいてくれることで、利用者が飽きずに過ごせて、自分自身も安心して楽しめた」

- 記録集の作成と美術館ウェブサイト上での公開

https://www.kanazawa21.jp/files/lab.5_ROUTINE_RECORDS_2022.pdf

福祉施設の館内散策と展示体験サポート（12 月）

参考

会場風景動画

https://www.youtube.com/watch?v=8gx3k4oKFAU